

# コミュニケーションを支えるのは教師： From Recitation to Dialogue

今井裕之

(兵庫教育大学)

## 1. What color do you like?

ある小中の教員による研究会で、小学校英語について議論した際に、「小学校で What color do you like? と尋ねあう活動をする意図は何でしょうか?」という問いが出されました。当初は質問の意図を共有することに苦労しながらも、この問いに端を発した議論はとても有意義なものになりました。

加藤京子先生(兵庫県三木市立緑が丘中学校)が「好きな色を尋ねあうにしても、セーターの形のカードを使うとき、車の形のカードを使うときでは、何色が好きかは変わってくる。中学校では、携帯電話の色の好みなどを話すと盛り上がる」という主旨の発言をされました。「折り紙の活動をする際には、好きな色を尋ねあう必要がある」という小学校の先生の発言も印象に残りました。どちらの提案も、英語が、学習対象というよりも生徒や児童の生活を語る言語として位置づけられていることが印象的でした。言われてみれば、自分も車や携帯電話は白ですが、白いセーターは着ません。

## 2. コミュニケーション教育と英語教育

小学校外国語活動に、red, blue, yellow という色の名前を定着させるような、言語に軸足を置いた教育と、クラスの友達をよりよく知ろうとするような、コミュニケーションの教育の2つの形があるとしたら、前者は、飽きさせないよう工夫をしながら表現を繰り返させること、後者は、互いに興味関心を抱き、対話が続くよう働きかけることが、それぞれの教育目標となるでしょう。

小学校外国語活動の授業には、このような英語教育的なもの、コミュニケーション教育的なもの、さ

らに国際理解教育的なものの3種類があるように思います。コミュニケーション教育を核にした実践では、英語もさることながら、どのように自分のターンをとり、他者にターンをゆだねるかが大切な学習課題となります。他者のことばに自分のことばをつないでゆく方法を学び、一方で、英語の力不足を補うために絵や道具やジェスチャーなどをコミュニケーションのリソースとして活用することも学びます。何よりコミュニケーション活動を通して、他者を肯定的に受け入れ、自らを他者の解釈にゆだねることの大切さと難しさを体験的に学びます。このようなコミュニケーション力を獲得するには、やはりコミュニケーション教育そのものが必要です。

英語教師は英語を教えることが本職であり、コミュニケーションを教えることは、本来別の教育なのだから自分の仕事ではないと切り離してしまう議論もできるかもしれません。しかし、各々に実践方法が異なる2つの教育を、今回の特集タイトルである「コミュニケーションを支える文法」のあり方を考え、重ねあわせようとする 것도、私たちの仕事なのだと考えることもできるでしょう。前述の加藤先生のお話のような、「ことばを選びとって使う実感」を通してことばの形式と意味と使われ方を学ぶ活動に、その可能性を探してみたいと思います。

## 3. 文法知識の「習得」と「活用」

文法や語彙の知識を身につけ(習得)、身につけたことを用いて自らの思考や判断を表現すること(活用)が、今回の『学習指導要領』の改訂にあたり、教科を問わず強調されるようになりました。「習得・活用・探究」という三者の関係で議論されることが多い概念ですが、これらのうちの特に「習得」と「活

用]の関係を具体的に考えることで、「コミュニケーションを支える文法」にアプローチしてみましょう。

「習得」の対象は知識や技能です。「活用」は、その知識や技能を用いて考えを深め、表現することだとされています。そうすると、「習得した知識を活用して思考・表現する」という一方向的な学習過程が思い浮かびますが、必ずしもそれだけではなく、「活用を通して習得した知識の理解が深まる」という点で、双方向的、相互作用しあう関係であるとも指摘されています。ここでは、習得の対象となる知識を文法とみなし、活用の目的となる思考・表現をコミュニケーション活動とみなして、具体的に分析してみましょう。

#### 4. NEW CROWN を使った言語活動と習得、活用

NEW CROWN には、CHECK IT, USE IT (THINK ABOUT IT), DO IT (TRY) などの言語活動があり、文法指導からコミュニケーション活動へつながる枠組みを構成しています。当然ながら、「どれが習得で、どこからが活用なのか？」という疑問が浮かび上がると思います。徹頭徹尾すべて「習得」である！と考える先生もいらっしゃるかもしれませんが、THINK ABOUT IT と TRY だけが「活用」らしい思考活動だという説、USE IT と DO IT の間が境界線という説もあるかもしれません。

授業は、先生と生徒の構えしだいでいかようにも変化するので、どの説も正しいと思いますが、私の想像の及ぶ範囲では、CHECK IT は、やはり習得のための活動です。それ以外の活動は、指導方法しだいで活用の活動になり、穏当な区分をすると以下のようになると思います。

| 習得的活動    | 中間的           | 活用的活動               |
|----------|---------------|---------------------|
| CHECK IT | USE IT, DO IT | THINK ABOUT IT, TRY |

表1 NEW CROWN の言語活動の分類

substitution drill として使うことも可能な CHECK IT は、習得のための練習に適しています。USE IT は、活動の幅が広く、知識や技能の定着(習得)をねらったものから、発話者が伝えたい意味を状況に即して言ったり書いたりするものまでありま

す。例えば、3年生 USE IT 6-1 (図1) では、英語を聞いて、どの動物の説明かを答えます。

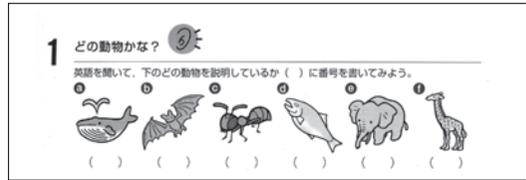


図1 習得に近い USE IT の例：どの動物かな？

知識や技能を用いて思考するのが活用だとすると、この活動では、聞き手の思考や判断が求められてはいますが、CHECK IT の「聞いてみよう」に似たものであり、関係代名詞の活動ゆえ、理解の段階にとどめる意図が見えます。This is an animal that is very small. It is very busy before winter. What is it? (Answer: An ant.) といったクイズ形式のリスニングですので、より思考や判断を促すためには、先生や生徒自身がクイズを考えてもよいでしょうし、指定されたものをおもしろおかしく定義する definition game などをすれば、より発話者の意味の込められた活用になるでしょう。

実際の使用場面では誤用が多いといわれる want 人 to ~ に関する 3年生 USE IT 7-1 (図2) は、島田先生の指示に従い、日本語が苦手な留学生にキャンプのスケジュールを英語で説明するという活動です。

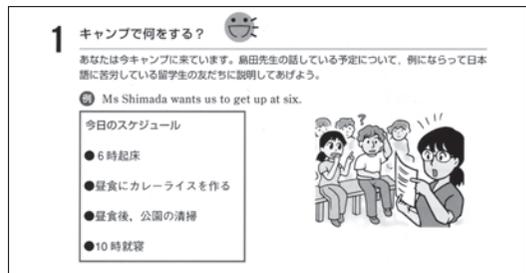


図2 活用に近い USE IT の例：キャンプで何をします？

その日のスケジュールは日本語でリストアップしてあり、島田先生も日本語で指示するという設定で、生徒は Ms Shimada wants us to clean the park after lunch. といった具合に、英語にして相手に伝える練習です。場面、状況設定が詳細で現実的という点では、この USE IT を活用の言語活動に用いることができると考えられます。ただ、Ms

Shimada wants us to ～.と表現したくなるような、生徒たちがあまり気乗りしない内容や状況を多く設定するのは難しいので、どの問いもすべて want 人 to ～を使わせるのではなく、一部には自分を主語にした表現 We will cook rice and curry for lunch! など、楽しみな内容と対比させるなどの工夫をすることで、より活用らしい活動になるかもしれません。

DO IT は習得と活用の両方が段階的に構成され、TRY は活用にあたる言語活動になっています。2年生の DO IT WRITE 1 では、STEP 1 で、モデルスピーチが提示され、STEP 2 で、モデル文を改作して自分らしい文をつくり、TRY で、自分の将来についてのスピーチにまとめて発表する構成になっており、習得→活用の流れで言語活動が進みます。2年生の活用型の活動の中ではハイライトのひとつではないでしょうか。

CHECK IT から DO IT へと流れる NEW CROWN の言語活動の配列や、DO IT 内の活動配列などから、おおむね「習得」→「活用」へ進むようにデザインされていることが分かります。これは他の多くの教科書にも共通して言えることだと思います。整然とした理解から思考、表現へのプロセスを設けることが、英語教育の観点からは大切であることはいまでもありません。しかし、コミュニケーション教育の観点からこれらの言語活動を見ると、どうでしょうか。冒頭のエピソードにあった、What color do you like? と、互いの好みを聞きあうような活動に見られる、1人称同士のやりとりによる相互理解、受容されている実感、自己肯定感を持つような活動などの視点から見たときに、教科書の言語活動がカバーしきれない部分を、教室で先生と生徒たちで補ってほしいと思うことがあります。

## 5. 英語授業研究から見えること

教科書の言語活動には、生徒同士の交流を促す活動や、共同で行うプロジェクト的な活動もありますが、多くは文法の定着を念頭に繰り返し聞いたり、言ったり、書いたりする活動で占められています。繰り返し同じ構造の文を聞いたり書いたりすることを少しでも自然にするために、Akira, Mary, Ms

Shimada と、人物が入れ替わり立ち替わり登場して、本を読んだり、テニスをしたりします。このような架空の3人称が繰り広げる世界に身をゆだねてコミュニケーションをする気持ちにはならないでしょうし、そのような言語活動だけでは、教室で学びあう互いの理解や関係が発展することは難しいでしょう。文法指導がコミュニケーションに結びつかないのは、文法指導がコミュニケーション「能力」を育てられないというよりも、英語授業の場における、コミュニケーション教育が乏しいのではないのでしょうか。

小学校から中・高等学校の英語授業を観察研究していると、学年が上がるにつれ、コミュニケーション活動、コミュニケーション教育の相対的な割合がどんどん減っていくことが実感できます。特に高校1年生あたりからの減少が顕著のように思います。その理由のひとつが、学習対象となる言語材料の著しい増加であることはいまでもありませんが、それだけでもないように思います。

大雑把すぎるとお叱りをうけるかもしれませんが、英語の授業で私たちは、2つのことをしているように思います。1つは「他者とことば・声を合わせること」です。他者には教科書の文章も含まれます。小学校からの入門期に、歌やチャンツや絵本を使うのは、良質のモデルになることばや教室の友だちの声と、自分のことば・声を同調させているのだと思います。授業研究の用語で recitation と呼ばれる行為です。スピーチや教科書本文を暗唱することだけを指すのではなく、先生の質問に対して、期待される答えで応じることも recitation です。

Teacher: What's the date today?

Students: It's November 16th.

Teacher: Good.

このようなやりとりが、小学校から高等学校、大学まで頻繁に見られます。英語の形式と意味を結びつけて覚えること、日本語訳と対照して英語を思い出せることは、英語教育の観点から大切であり、モデルとなる正しい英語に自分の英語を合わせる recitation が学習方略の上からも効率がよいと言えます。

もう1つしていることは「ことば・声をつなげる

こと」です。会話ばかりでなく、テキストを読んで自分の感想を述べるのも、ことばをつなぐことになります。授業研究の用語では dialogue と呼びます。dialogue は、他者のことばを受け止めたり、相手に自分のことばの解釈をゆだねたりすることです。不安と期待とが入り交じる、他者のことばとの出会いの活動です。小学校の外国語活動では、授業の最後にしばしば「振り返りカード」を書いて、その日の学びを言語化します。低学年での歌を中心にした recitation 活動の振り返りには、「楽しかった」ということばが頻繁に出てきます。一方、中・高学年で、インタビューなどの対話活動を含む dialogue 活動をしたあとの振り返りには、「どきどきした」という表現が見られます。この「どきどき」は、伝わらないかもしれない、受け止められないかもしれない不安感が、成功体験を通して解消され、ほっとしたときの実感を表すことばとして解釈することができます。コミュニケーション教育の授業には、このようなどきどき感が欠かせないのだと思います。

## 6. コミュニケーションを支える文法指導

文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえるようにとの新『学習指導要領』の文言は重要だと思います。言語形式の意味とともに事例を示しながら用法を説明すること、例えば Is there a good restaurant in your town? と尋ねられるのと、Are there ~? と複数形で尋ねられるのと、町の住人としてどちらが気分がよいかといった問いを生徒に投げかけるのは大切なことだと思います。

それに比べて、セーターなら茶色が好きだけれど、携帯は絶対白！ ということを英語で話すことの大切さは、「コミュニケーションを支える文法指導」としての意義が薄いと感じられるかもしれません。しかし、吉田 (2008) による、現在完了の使用の正確さを比べた研究から、発話者個人の意味を込めた文で練習をしたグループが、与えられた文で練習したグループに比べて、正確さ自体は大差なかったものの、完了形の使い過ぎ (overuse) による間違いが少ないという結果が得られました。また、データが

あるわけではありませんが、充実した小学校外国語活動の実践を行っている学区の中学校の先生が「小学校英語をやるようになって、会話活動をするときに、A-B-A で終わっていたターンが、もう一往復増えて A-B-A-B-A まで続くようになった」とおっしゃっていました。外国語活動以外の授業ではほとんど発言しない児童が、英語では発言するので驚いたという声も聞いています。

「習得」でことば・声を合わせる recitation を保証しつつも、「活用」でことば・声をつなげる dialogue の活動、発話者個人の意味を教室の活動に持ち込むことは、文法指導の上でも、コミュニケーション力育成の上でもカギになるように思います。

## 7. コミュニケーションを支える教師

生徒の思考を促す「活用」(dialogue) を教室に持ち込むには、授業準備をする教師にとって負担になる面もあると思います。ただ語彙、文法、構文の定着を図るだけが教育目標であれば、生徒に学ばせる (recitation させる) 英文を提示できさえすればよいこととなります。モデル文の提示を行ったり、本文に書かれている事実を忠実に再現したりするための Q&A などをすればよいわけです。

しかし、今回議論したように、学習者の思考や判断を表現しあうコミュニケーション教育をしようとする場合、教師の役割は、モデルの提示役から、生徒の発言を引き出す (elicit) 役へと、発想を転換しなくてはなりません。教師がよく使う “Good.” という評価発話は、対話を終わらせてしまいます。教室の対話者とことば・声をつなげる力が教師に求められています。このことは、話しことばだけでなく、書きことばでも同様です。田中、田中 (2009) は、リーディング活動の中で、生徒の思考、表現を引き出すための発問について議論しており、参考になるのではと思います。

### 【参考文献】

- 田中武夫、田中知聡 (2009) 『英語教師のための発問テクニック—英語授業を活性化するリーディング指導』大修館書店  
 吉田勝雄 (2008) *Effects of Self-expression Activities on the Learning of the Present Perfect: A Cognitive and Affective Perspective*. 兵庫教育大学修士論文